

ISSN 1343-4837

土佐山田町埋蔵文化財発掘調査報告書第28集

# 加茂ハイタノクボ遺跡

県道宮の口～深淵線建設に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書

2000. 3

土佐山田町教育委員会

# 加茂ハイタノクボ遺跡

県道宮の口～深淵線建設に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書

土佐山田町教育委員会



1. 復弁蓮華文軒丸瓦（香川県 仲村庵寺出土 善通寺市郷土館蔵）



2. 復弁蓮華文軒丸瓦 加茂ハイタノクボ遺跡出土（1990年表採）

## 序 文

土佐山田町の自然と文化は、長い歴史と風土の中で、われわれの先祖のたゆまない努力と創意により生み出されたものであります。このすばらしい自然と文化を受け継ぎ次代へ伝承することは、現代の我々に課せられた責務であると考えます。

町内東部の物部川流域には原始・古代の遺跡が存在し、調査・研究がなされてきました。

特に片地地区には平成9年度に高知工科大学が開学したのに伴い周辺整備が進められています。

今度、県道宮ノロ～深淵線新設に伴う加茂ハイタノクボ遺跡の発掘調査が実施されました。出土した遺物から香川県の旧善通寺の瓦と同范であることが判明しました。空海ゆかりの高名な寺院との技術交流は文献資料の少ない土佐の古代史に重要な資料を加えるものです。

このたび刊行されることになりました本報告書は、文化財保護のために取り組んだ成果です。本書が貴重な遺跡の記録として学術的研究の資料、また文化財に対する理解と認識のための参考資料として多くの方々に活用されることを望む次第です。

最後に、発掘調査、整理作業、報告書作成に尽力された方々等多くの関係者に対し、衷心より謝意を表す次第です。

平成12年3月31日

土佐山田町教育委員会  
教育長 中山 熊義

## 例　言

1. 本報告書は、土佐山田町教育委員会が平成10年度に実施した加茂ハイタノクボ遺跡の試掘調査報告書である。
2. 加茂ハイタノクボ遺跡は、高知県香美郡土佐山田町加茂字ハイタノクボに所在する。
3. 発掘面積は3.6 m<sup>2</sup>であり、調査期間は平成10年8月3日～17日までの実動10日間を要した。
4. 発掘調査の体制は以下の通りである。

調査総括　中山　泰弘　(土佐山田町建設部計課主事、教育委員会社会教育課主事  
併任)  
調査担当　川端　清司　(高知県文化財団埋蔵文化財センター　非常勤職員)  
調査担当　伊藤　仁　(元土佐山田町教育委員会臨時職員)  
庶務担当　山本　宗　(土佐山田町教育委員会社会教育課主事)
5. 本書の編集及び執筆はすべて川端が行った。
6. 本文中に使用した地図は建設省国土地理院発行の1/25000(承認番号 平成11年四複 第248号)を、また、土佐山田町建設部計課作成の1/2500、1/10000の地形図を使用した。
7. 本報告書作成にあたって、奈良大学の水野正好学長、帝塚山大学の森郁夫教授をはじめ、高知県教育委員会文化財保護室、高知県文化財団埋蔵文化財センターの山本哲也氏、吉成承三氏、武吉真裕氏から貴重な助言、指導を賜った。  
また、遺物の実見、実測については高知県側では加茂地区の日吉神社元宮司の岡林華伝氏、香川県側では安藤文良氏、大森武氏、川畑聰氏(高松市教育委員会)、善通寺市教育委員会、丸亀市教育委員会、豊中町教育委員会、善通寺市立郷土館、丸亀市立郡家小学校から御指導、御協力を賜った記して感謝したい。
8. 発掘調査にあたっては、高知県南国耕地事務所と地元地権者の方々から御協力、御援助を賜った。記して感謝の意を表したい。
9. 発掘調査の現場作業員は次の方々である。猛暑の中を作業に従事していただいた方々に記して感謝の意を表したい。  
坂田青児、浦西慶規、藤田倫三(以上、高知工科大学学生)、永森崇裕(高知工業高等専門学校)、濱田　誠、濱田和博(高知県立農業高等学校)、今井春恵、竹崎芳子
10. 遺物整理、報告書作成にあたって次の方の御協力を得た。記して感謝の意を表したい。  
中村千代、畠山美保
11. 今回出土した遺物・資料は土佐山田町教育委員会で保管している。遺跡の略号は98-17YKHである。

## 本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	1
3 調査に至る経緯と経過	4
第2章 調査の成果	6
1 調査の方法について	6
2 各トレンチの概要について	6
3 調査の成果～まとめにかえて～	8
4 遺物について	11
5 95-YK (1996年1月) 調査時出土遺物について	11
6 今次試掘調査 (98-17YKH) 出土遺物について	13
7 まとめ	16
第3章 考 察	21
1 加茂ハイタノクボ遺跡の周辺でこれまでに出土した遺物について	21
2 香川県出土瓦と本遺跡出土の瓦について	23
3 まとめ	28
遺物観察表	31

## 挿図目次

F i g. 1 周辺の遺跡 (S=1/50000)	2
F i g. 2 今次調査対象位置図 (S=1/5000)	6
F i g. 3 調査区トレンチ位置図 (S=1/200)	7
F i g. 4 各トレンチセクション図 (S=1/40)	9
F i g. 5 TR-1, TR-4平面図 (S=1/40)	10
F i g. 6 95年度調査時出土遺物実測図1 (S=1/3)	12
F i g. 7 95年度調査時出土遺物実測図2 (S=1/3)	13
F i g. 8 加茂ハイタノクボ遺跡出土遺物実測図1 (S=1/3)	14
F i g. 9 加茂ハイタノクボ遺跡出土遺物実測図2 (S=1/3)	15
F i g. 10 加茂ハイタノクボ遺跡出土遺物実測図3 (S=1/3)	17
F i g. 11 加茂ハイタノクボ遺跡出土遺物実測図4 (S=1/3)	18
F i g. 12 加茂周辺で表採、保管の遺物	22
F i g. 13 香川県出土瓦その1 (S=1/3)	24
F i g. 14 香川県出土瓦その2 (S=1/3)	25
F i g. 15 加茂ハイタノクボ遺跡出土瓦範傷位置図	26
F i g. 16 軒丸瓦範傷進行図	27

写真図版

巻頭図版 1 復弁八葉蓮華文軒丸瓦 香川県仲村廃寺跡出土（普通寺市郷土館蔵）

2 復弁八葉連華文軒丸瓦 高知県加茂ハイタノクボ遺跡出土

P L 1 加茂ハイタノクボ遺跡 各トレンチ状況写真 1

P L 2 加茂ハイタノクボ遺跡 各トレンチ状況写真 2 と出土遺物

P L 3 加茂ハイタノクボ遺跡周辺表探資料

P L 4 加茂ハイタノクボ遺跡関連資料 1

P L 5 加茂ハイタノクボ遺跡関連資料 2 と調査時出土遺物 1

P L 6 調査時出土遺物 2

## 第1章 調査にいたる経緯と経過

この章では加茂ハイタノクボ遺跡の周囲の状況と調査にいたる経過について述べることにする。

### 1、地理的環境

高知県香美郡土佐山田町は、県中央部に広がる高知平野の東部に位置し、東側には県下第2位の河川である物部川が南流し、扇状地形を形成している。また西側では、長岡台地が広がっており、現在の市街地もここに立地する。南側では、物部川の氾濫によって形成された河岸段丘が下流部に向かって広がり、北側は山地である。

今回調査を行った加茂ハイタノクボ遺跡は、物部川左岸の河岸段丘上に立地し、南北に細長い平野部の斜面に立地する。遺跡の現況は山地を造成した畑であり、東側には山が迫っている。日当たりも良く、風の害も受けにくい場所である。

### 2、歴史的環境

次に加茂ハイタノクボ遺跡を取り巻く周辺の遺跡を手がかりにして、この地域の歴史的環境について考えてみたい。

まず、旧石器時代の遺跡は近年になって、南国市の奥谷南遺跡が発見されたのに続いて、町内でも新改西谷遺跡（22）から多くのナイフ形石器が見つかった。今後当地域での研究の中核となる重要な遺跡となろう。（註1）

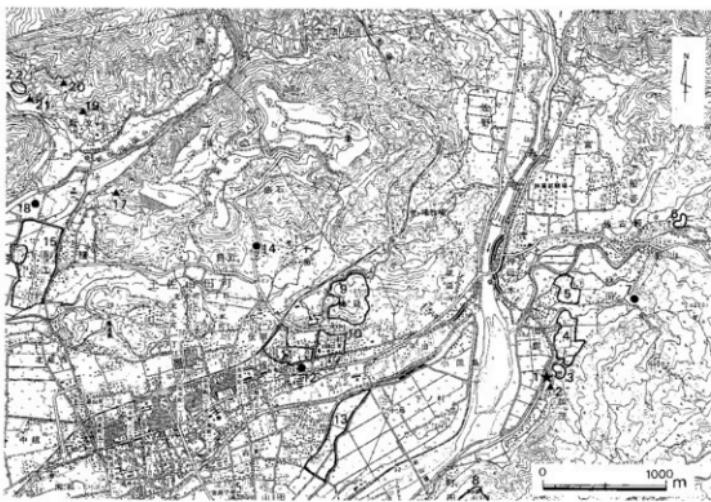
続いて縄文時代に入ると町内でも飼古屋岩陰遺跡（縄文早期～前期）や林田シタノヂ遺跡（5）が調査されている。林田シタノヂ遺跡からは、縄文時代晩期の遺物と遺構がともに発見されており、物部川左岸流域では数少ない縄文時代の遺跡である。（註2）

弥生時代になると、物部川の下流域では、南国市の田村遺跡群のように弥生時代前期～後期まで継続的に集落が営まれるが、町内では弥生時代中期になってから遺跡の展開が見られる。稲荷前遺跡（13）や龍河洞窟遺跡が中期の遺跡としてあげられる。（註3）

次の弥生時代後期になると町内全域で遺跡数が増加する。加茂ハイタノクボ遺跡の周辺では林田遺跡（4）が、また、物部川を挟んで対岸にはヒビノキ遺跡（10）、ヒビノキサウヂ遺跡（11）が存在する。これらの遺跡は次の古墳時代～中世までの長期にわたって集落が営まれるようになる。（註4）

古墳時代には、前述した林田、ヒビノキ、ヒビノキサウヂの3遺跡のほかに町内の西側にある須江地区でも須江上段遺跡（15）やその西隣に位置する久次遺跡群でも弥生時代後期から古墳時代前期まで継続して集落が形成されるが、前期の古墳は未発見である。また、古墳時代中期になんでも古墳・集落とも現時点では見つかっていない。町内で古墳が作られるのは古墳時代後期に入ってからである。

林田1、2号墳（7）は現在の林田集落の東側山裾部に残る円墳であり、1号墳は破壊されて現存しないが、2号墳は横穴式石室が一部残っている。対岸のヒビノキ遺跡のある地区では四国最大の規模を誇る一辺40mの方墳、伏原大塚古墳が近年調査された。（註5）



No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1★	加茂ハイタノクボ	古代	12	伏原大塚古墳	古墳
2	山本前田窯跡	古代	13	稻荷前	弥生～中世
3	日吉神社	古代～中世	14	大元神社古墳	古墳
4	林田	弥生～中世	15	須江上段	弥生～中世
5	林田シタノヂ	縄文～古代	16	須江上段松ノ本	古代
6	影山城跡	中世	17	植タンガン窯跡	古代
7	林田1, 2号墳	古墳	18	須江ツカアナ古墳	古墳
8	烏ヶ森城跡	中世	19	林ノ谷窯跡群	古代
9	楠目城跡	中世	20	東谷窯跡群	古代
10	ヒビノキ	弥生～中世	21	西谷窯跡群	古代
11	ヒビノキサウヂ	弥生～中世	22	新改西谷	旧石器～中世

F i g . 1 周辺の遺跡 (S=1/50000)

また、須江上段遺跡の北側にも須江ツカアナ古墳（18）がある。径30～38mの比較的大きな楕円形の円墳であり、前述の伏原大塚古墳に次ぐものである。しかしながらこれらの古墳の造営に係わったと見られる集落については遺物の出土があるものの明確な遺構は見つかっていない。今後の成果に期待したい。（註6）

さらに古代になっても林田、ヒビノキ、須江の三ヶ所を中心として継続的に集落が営まれるが、その一方で窯業生産の遺跡も見られるようになってくる。

林田地区では、今回調査を行った加茂ハイタノクボ遺跡（1★）やその隣にある山本前田窯跡（2）が古代の遺跡としてあげられる。

また、ヒビノキ遺跡の周辺では、ヒビノキサウデ遺跡（11）から9～10世紀にかけての建物跡が発見されている。このことからヒビノキ遺跡と共に、弥生～古代、中世にいたる複合遺跡と考えられる。（註7）

また、須江地区では須江上段遺跡（15）を始め、須江上段遺跡松ノ本地区（16）があげられる。特に松ノ本地区は駅家跡と考えられていたが、建物跡と共に倉庫跡も発見されており官衙的性格の強い遺跡と考えられている。その東側の植タンガン窯跡（17）では、南国市の比江廃寺に瓦を供給していた窯跡として古くから知られている。

そして、須江地区の北側にある新改地区では、7世紀後半から須恵器の窯跡が築かれるようになる。新改西谷窯跡（21）や林ノ谷窯跡群（19）、東谷窯跡群（20）が代表的な遺跡としてあげられる。

新改西谷窯跡は、出土遺物から7世紀の後半の窯跡と考えられている。また、近年調査された林ノ谷窯跡群は3基で形成された登窯で8世紀の中頃の窯跡である。東谷窯跡群では、土佐國分寺と同じ瓦が出土しており、國分寺の瓦窯と考えられている。（註8）

中世になると、楠目城跡（9）を中心とした山田氏が現在の土佐山田町の全域を含む香美郡を支配下に組み込んで勢力を誇っていた。この時代の代表的な遺跡としては、先の楠目城跡をはじめ、物部川左岸では鳥ヶ森城跡（8）、影山城跡（6）がある。その後、山田氏が長宗我部氏によって滅亡した後、これらの城跡も廃絶していったようである。

近世に入り、長宗我部氏が滅亡した後、山内氏が土佐の国に入ると、現在の市街地を中心にして町作りが行われるようになり、加茂、林田地区の向かい側には野中兼山によって山田堰が築かれ、物部川の下流域を現在に至るまで潤している。

#### 註・参考文献1

（註1）奥谷南遺跡は、『高知県埋蔵文化財センター年報7、1997年度』を、新改西谷遺跡は、『埋文こうち第12号』平成11年3月高知県教育委員会刊を参照にした。

（註2）森田尚宏『飼古屋岩陰遺跡発掘調査報告書』日本道路公団・高知県教育委員会1983、山崎正明『林田シタノチ遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会1993を参照。

（註3）高知県教育委員会編『よみがえる田村遺跡群』高知県教育委員会1987、山本

哲也『稲荷前遺跡』土佐山田町教育委員会 1990 を参照。

(註4) 森田尚宏『林田遺跡』土佐山田町教育委員会 1985、岡本健児・広田典夫『高知県ヒビノキ遺跡』土佐山田町教育委員会 1977、高橋啓明『ヒビノキサウチ遺跡』土佐山田町教育委員会 1990 を参照。

(註5) 林田 1、2 号墳については、『土佐山田町史』に詳しい。広田佳久『伏原大塚古墳』土佐山田町教育委員会 1993 を参照。

(註6) 須江ツカアナ古墳については『高知県埋蔵文化財センター年報 4、1994 年度』に調査の概略が記されている。また、須江地区の対岸部には久次遺跡カリヤガノ地区（弥生～古代）が調査されており、この時期の古墳と集落の関係を考える上で興味深い調査事例といえる。『高知県埋蔵文化財センター年報 3、1993 年度』を参照。

(註7) (註4) 高橋啓明『ヒビノキサウチ遺跡』土佐山田町教育委員会 1990 を参照

(註8) 須江上段遺跡と、須江上段遺跡松ノ本地区の調査成果については、『高知県埋蔵文化財センター年報 1、1991 年度』を、須江地区的古代の窯跡については、『土佐山田町史』古代の窯業編を参照。

### 3、調査にいたるまでの経緯と経過

加茂ハイタノクボ遺跡と山本前田窯跡の周辺で古瓦が採集できることは從来から知られていた。古くは加茂地区の日吉神社に納められていた遺物の中に戦前に表採されたものと見られる遺物が存在していたからである。(註9)

また、林田遺跡を発掘調査した際にも、若干ではあるが瓦が出土しており、周辺での窯業生産を想定した見解が出されている。その後、『高知県遺跡地図・香美、長岡ブロック』(平成 2 年 3 月刊) 作成の際に現地踏査が行われており、山本前田窯跡の遺跡範囲はこの時に登録されたものである。(註10)

加茂ハイタノクボ遺跡がにわかにクローズアップされるようになったのは、1990 年の春に遺跡の北端部にある石垣に崩壊の恐れがありその改修工事が行われた際に多量の瓦類が出土したからである。この時に軒丸瓦 2 点が地権者の手によって表採・保管されていたところ、武吉真裕氏(高知県埋蔵文化財センター)によって発見され、同センターに報告された。その後、山本哲也氏(現在、高知県埋蔵文化財センター調査第 1 班長)が周辺の踏査を行い、窯跡の可能性が高いとの結論に達した。(註11)

以上の経過を踏まえ、土佐山田町教育委員会は加茂地区の古代における窯業生産の実態究明を進めるための基礎資料を得るために、1996 年の 1 月に遺物の出土した地点付近にトレンチによる試掘調査を実施し、コンテナ 2 個分の瓦類を得た。(註12)

さらに、1998 年に入ると加茂地区の北側に近年開学した高知工科大学の方面に遺跡の西側を南北に走る県道官ノロ～深瀬線の事業計画がもちあがった。そのため今回の遺物

発見地の約半分が削平を受けることになり、遺物発見地を加茂ハイタノクボ遺跡と命名し、範囲確認のための試掘調査を行うことになったのである。

#### 註・参考文献 2

- (註 9) 遺跡の北側にある日吉神社の元宮司岡林華伝氏（土佐山田町文化財保護審議会委員）から同神社所蔵の瓦類（軒丸瓦 2 点、軒平瓦 1）を実見させていただき、遺物発見の状況なども伺った。これらの遺物は今回初めて発表するものである。
- (註 10) 森田尚宏『林田遺跡』土佐山田町教育委員会 1985、P 47
- (註 11) 山本哲也氏、武吉真裕氏には踏査や遺物発見の状況、遺物観察上の所見などで指導を賜った。また、武吉氏からは発見当時に取られた拓本および実測図を快く提供して頂いた。衷心より感謝する次第である。武吉氏が発見・報告された遺物も今回合わせて発表するものである。
- (註 12) 1996年1月に行った調査で出土した遺物も今回合わせて報告したい。詳細は後述する。

## 第2章 調査の成果

### 1、調査の方法について

今回の調査は、道路拡張に伴う範囲確認調査という性格から調査対象地 (Fig. 2) の中で拡張工事によって削平を受けると考えられる地点を中心に TR 1 ~ TR 5までの合計5ヶ所に4×2、もしくは2×2のトレンチを設定して表土～地山面まで人力によって掘削を行った。(Fig. 3)

### 2、各トレンチの概要について

これから各TRの層序と出土遺物を中心にその概要を述べたい。(Fig. 5)

#### TR-1

TR 4と共に調査区の北端に位置する。95年度に設けたトレンチはこのTR-1の北側にある。前回同様に良好な遺物の出土が期待されていた。

層序は第1層の暗灰褐色粘質土（耕作土）、第2層の黒褐色粘質土と明黄灰色粘土混入（礫入）、第3層の暗灰色粘質土（拳大の石混入）、第4層の黒褐色粘砂質土（人頭大の石混入）、第5層の暗褐色粘質土からなる。

遺物の出土状況は、1~2層目ではほとんど見られず、3層目から近世の瓦、陶磁器類と共に古代の瓦が出土した。4層目になると人頭大の礫と共に遺物は古代の布目瓦が多くなる傾向にあった。5層目まで掘削を試みたが、湧水のため中止する。トレンチの北側に向かって地山面が落ち込んでいるため、2mを超える深さになった。



Fig. 2 今次調査対象地位置図 (S = 1 / 5000)

*TR - 2*

TR - 1 の南側に設定したトレーニチで、TR 1 と 3 との間に位置する小TRである。

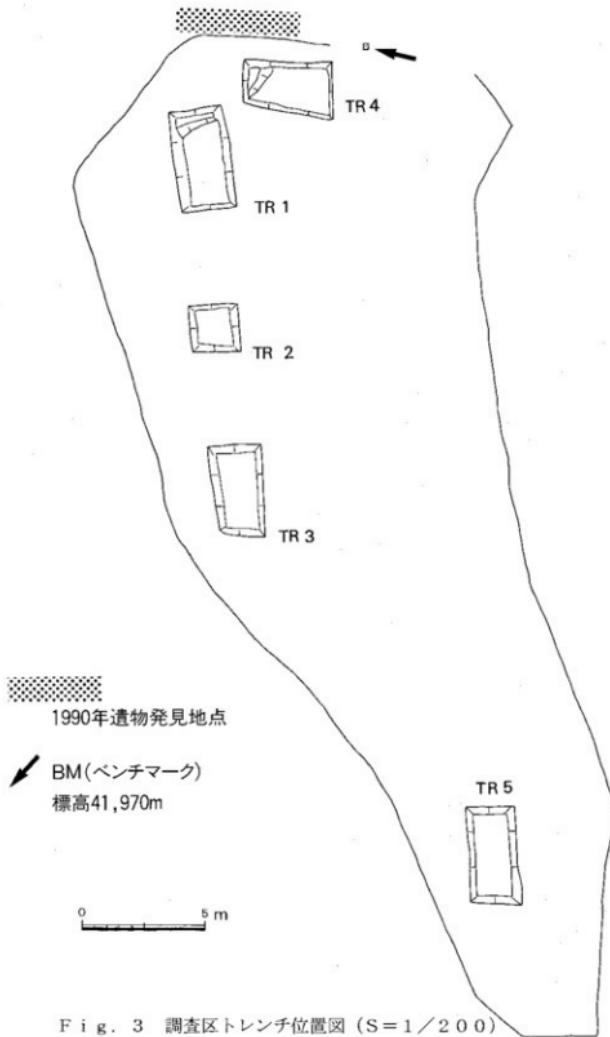


Fig. 3 調査区トレーニチ位置図 ( $S = 1/200$ )

層序は、1層目が暗灰褐色粘質土（耕作土）、2層目が明黄灰色粘質土（礫入る）、2'層目が黒褐色粘質土（礫入る）、3層目が暗灰色粘質土（大礫入る）となっており、特に、2、3層目からは多量の礫が入っており、中には作業員が数人掛かりでようやく搬出できたものがいくつかあり、下層への掘り下げは難渋を極めた。

遺物については、1層目から3層目までの間で出土したが、1～2層目では近世の瓦、陶磁器に混入した状態で古代の瓦が若干量出土している。3層目からも古代の瓦が少量出土したのみである。

#### TR-3

TR-2の南側に設定したトレンチである。層序は1層目が暗灰色粘質土（耕作土）、2層目が明黄褐色粘質土（礫入る）、2'層が黒褐色粘質土（礫入る）3層目が暗灰色粘質土（大礫入る）、4層目が暗灰褐色砂質土（大礫入る）となっている。

遺物については、TR-2と同様に1～2層目までは近世の遺物類と古代の瓦類が若干出土した。3層目に付いても同様に少量の古代の瓦が出土したのみである。

#### TR-4

TR-1の東側に隣接して設けたトレンチであり、良好な遺物の出土が期待されていたところである。層序は1層目が暗灰褐色粘質土（耕作土）、2層目が暗灰色粘土と黒褐色粘質土混入、3層目が黒褐色粘砂質土、4層目が暗褐色粘質土となっている。これ以降、地山面がTR-1に向かって落ち込んでおり、下層に掘削を試みたがTR-1と同様、湧水のため掘削を中止せざるを得なかった。

遺物としては1～2層目までは他のトレンチと同様に近世の遺物に混じって古代の瓦が出土した。3層目から4層目にかけてはTR-1と同じように多くの古代瓦が出土した。今回の出土遺物の大半がTR-1とこのTR-4からのものである。特に3層目からは、軒平瓦が1点出土しているのが注目できる。（この遺物については後述する。）

#### TR-5

このトレンチはTR-3の東南寄りに設定したトレンチであり、層序は1層目が暗灰褐色粘質土（耕作土）、2層目は明黄褐色粘質土（礫入る）からなっている。遺物は1層～2層上面からわずかな量が出土したのみであった。2層目からは遺物の出土がほとんど見られなかつたため、地山面と判断し、現況で掘削を中止した。

### 3、調査の成果～まとめにかえて～

これまでの各TRの概要を簡単にまとめると、TR-1とTR-4の1～2層目からは近世の遺物（陶磁器類、瓦）に古代の瓦片が混入しており、3層目以降になって古代の瓦が多くなる傾向が見受けられた。また、旧地形のものと考えられる落ち込みを確認した。

今回の調査区全体で見れば、すべてのTRで人為的に造成を行った痕跡が各TRの層序観察から伺える。調査区の現況が段々畑になっていることから、この周囲での地形の大幅な改変は、中～近世以降に行われたと考えられる。

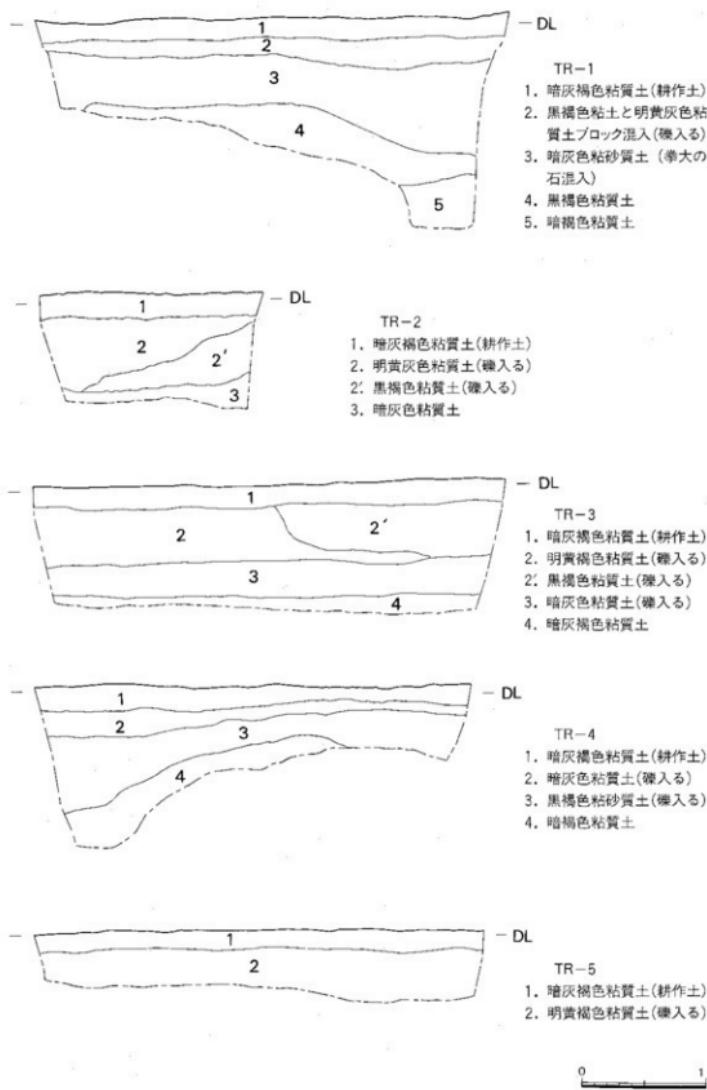
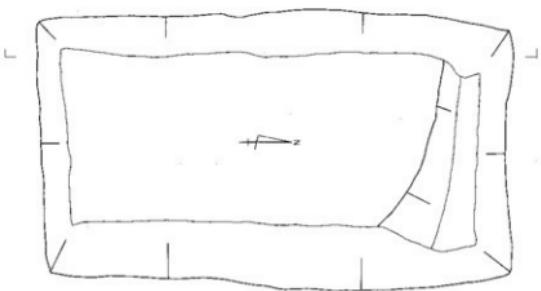
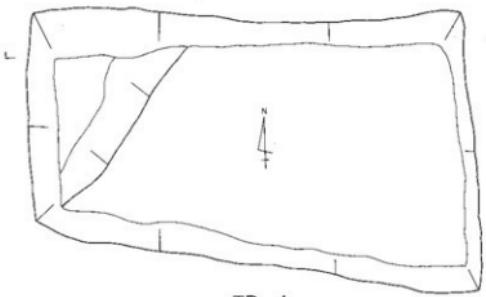


Fig. 4 各トレンチセクション図 ( $S = 1/40$ )



TR-1



TR-4

0 1 m

F i g . 5 TR-1, TR-4 平面図 ( $S = 1/40$ )

#### 4、遺物について

今回の調査で出土した遺物はその大半が古代の瓦である。この他には須恵器、土師質土器、陶磁器片、近世の瓦片等があるが、そのほとんどが細片であり、図示することは困難だった。ここでは出土量の最も多かった古代の瓦を中心に出土遺物について述べることにする。

また、第1章で述べた1995年度（1996年1月）の試掘調査時に出土した遺物も今回合わせて報告したい。

#### 5、95-YK（1996年1月）調査時出土遺物について

この時の調査で出土した遺物は、コンテナケース2箱であり、TR-1の北側とTR-4の西側にあたる地点に2×2mの試掘トレンチを設けて調査を実施したものである。

今回報告する遺物の内訳は軒平瓦、丸瓦、平瓦である。（Fig. 6 を参照）

##### 軒平瓦について（No. 1）

1は軒平瓦の瓦当面である。下外区に線縞唐草文を施し、内区には均整唐草文を配す。僅かに残る凸面部には箆削りの痕跡がある。

また、図化していないが軒平瓦の胴部も出土している。凹面部には若干の布目痕と縦方向のナデが見られる。凸面部では箆削り痕が観察できる。

##### 丸瓦について（No. 2）

2は丸瓦の玉縁部分である。凸面部には繩叩きを施した後、下方向へナデを行う。凹面部には模骨の外側にかぶせた袋の布目が残っている。また、玉縁も一部残っている。（註1）  
平瓦について（No. 3～6）

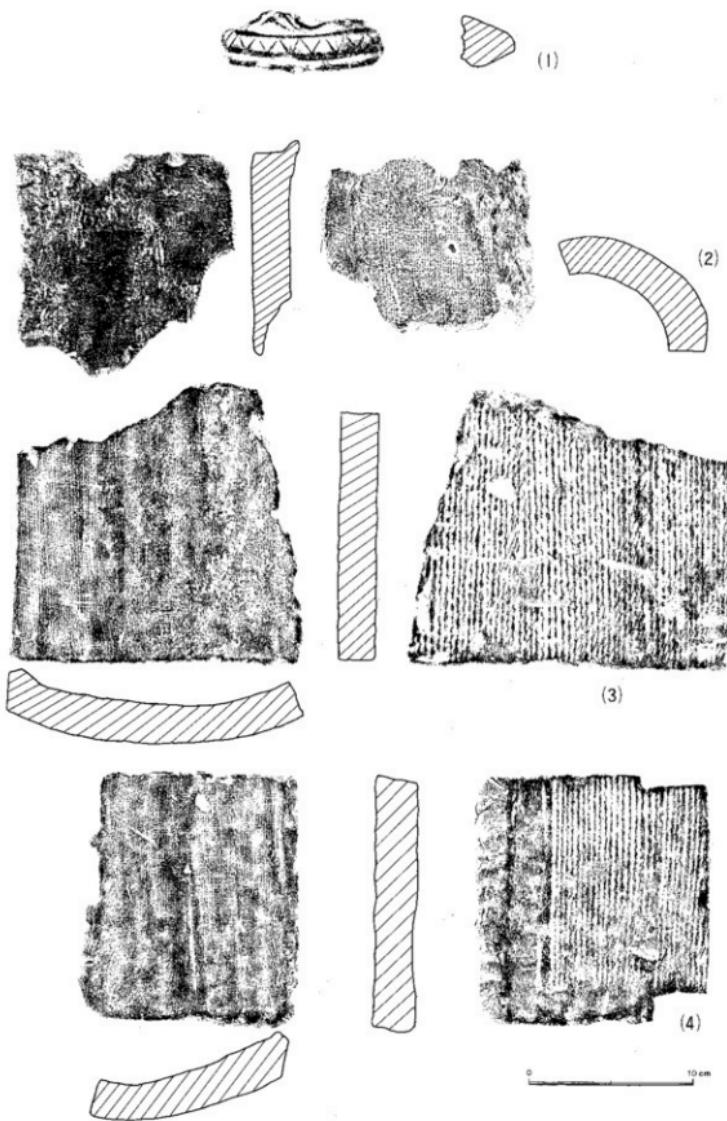
3は全体の約1/3ほどの大きさで、粘土板桶巻き作りと考えられる。凹面部には模骨痕と布目が残っており、模骨の幅は3cmほどである。凸面には繩叩きを行っている。側面には窓で面取りを施す。

4は平瓦の広端面側であり、凸面部には繩叩きを行っている。叩きの際に用いた工具の跡がはっきりと観察でき、約5cm幅の間隔で右側に向かって叩きを行っている事から、桶を左側に回転して調整を行ったものと考えられる。また、凹面部には模骨痕と布目が残っている。

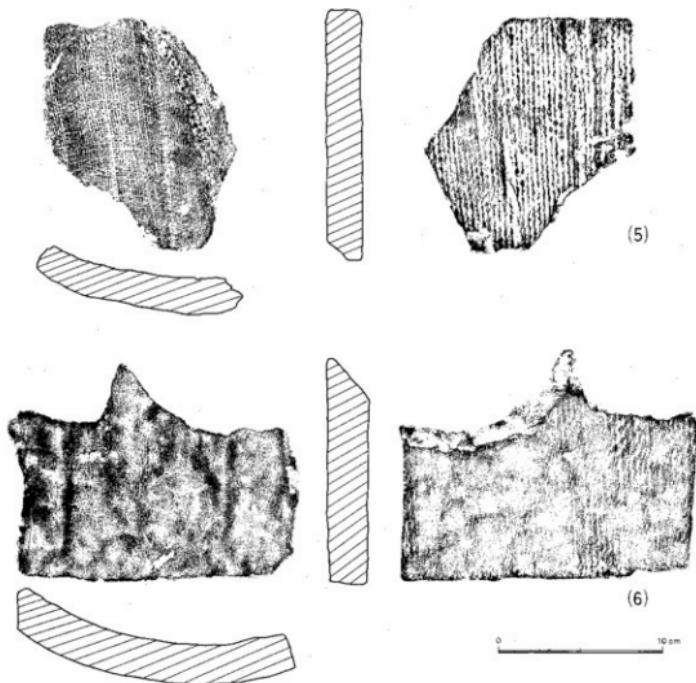
5は狭端面側の部分である。厚さは2cmであり、凸面部には左側から右側にかけて繩叩きが施されている。4と同様に左回転して整形を行っている。凹面部には撚紐で布を綴つた痕跡が観察できる。

6はこれまでの平瓦とは違った特徴を有している。遺物は広端面の部分であり、凸面部は繩目叩きを行い（一部縦方向へのナデ）、凹面は布目を丁寧な縦方向へのナデを施し、広端面側に横方向のナデを行っている。端面は丁寧な箆削りがみられる。

今回の遺物の観察から平瓦には少なくとも凸面には繩叩き、凹面には布目をそのまま有するものとそれをナデによって消す事で仕上げる2種類の方法があると考えられる。



F i g . 6 95年調査時出土遺物実測図 1 (S = 1 / 3)



F i g . 7 9 5 年調査時出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

#### 今次試掘調査 (98-17YKH) 出土遺物について

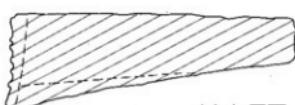
続いて今回の試掘調査で出土した遺物について述べる事にする。そのほとんどが瓦片であり、若干の土器類（須恵器、陶磁器、土師質土器、近世以降の瓦類）が出土したが、細片のため、実測に耐えうるものはなかった。瓦片は主にTR-1とTR-4から出土した。

(1) の軒平瓦はTR-4から出土したものである。凹面部にははつきりと布目痕が残り、瓦当面側から斜め方向の鎌削りを施している。凸面側の方は、同じく瓦当面側から縦方向の鎌削りをしている。瓦当面は約半分が残り、中心部より右側へ3回唐草文が反転している。上下の外区には正三角形に近い線鋸歯文が配され、断面は直線類を呈する。

(2) は軒丸瓦の一部と考えられる。凸面部には粘土を充填した跡が観察でき、凹面部には強い指頭圧痕がみられる。

(3) は丸瓦で玉縁が一部残っており、凸面部には叩きを行った後でナデ消している。凹面部は摩耗が激しいが、横方向に模骨の上端に附属する縄目が観察できる。玉縁部分より外側に粘土を充填した痕跡も観察できる。

(4) も丸瓦の一部である。凸面部には縄叩きを行った後、ナデ消している。凹面部には布目が観察できる。また、縦方向に模骨のものと考えられる溝状の痕跡もみられる。



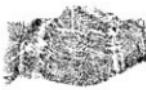
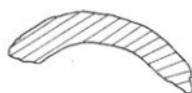
(1) 軒平瓦



凸面

凹面

(2) 軒丸瓦



凸面

凹面

(3) 丸瓦



凸面

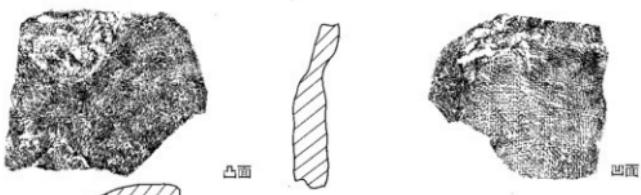
凹面

(4) 丸瓦

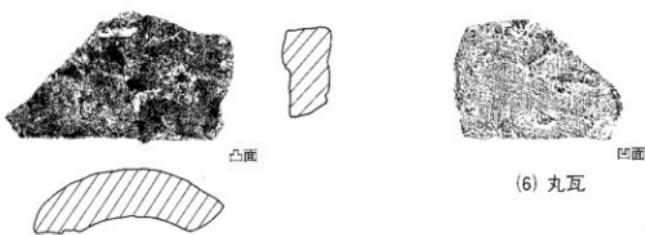


0 10 cm

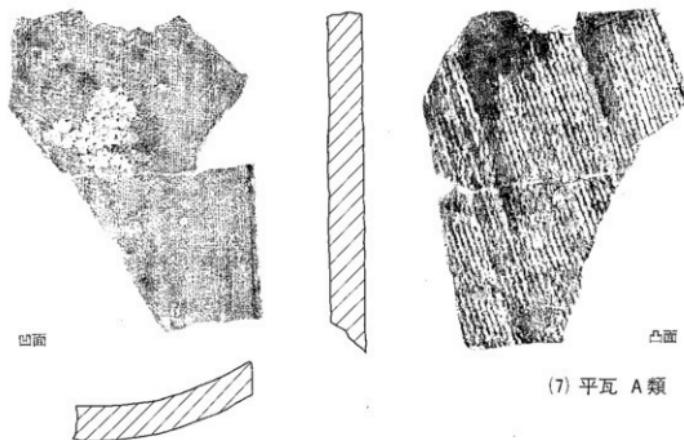
F i g . 8 加茂ハイタノクボ遺跡出土遺物実測図 1 (S = 1 / 3)



(5) 丸瓦



(6) 丸瓦



(7) 平瓦 A類

0 10 cm

F i g . 9 加茂ハイタノクボ遺跡出土遺物実測図 2 (S = 1 / 3)

(5) は丸瓦の上面の部分であり、粘土版を伸ばして成形したものと考えられる。上端面は玉縁を作り出しておらず、範切りを施す。凸面部は丁寧にナデが施され、凹面部の方は若干模骨に沿って内傾しており、布目の圧痕が残る。

(6) 丸瓦の下側の部分であり、端面は範切りで整えられている。凸面部には縦方向に範削りが施されている。凹面部には布目圧痕が観察できる。

(7) 平瓦で、凹面には布目が残り、桶状模骨の痕跡も観察できる。端面は、範によつて丁寧に切り取られている。凸面の方は、左より右斜め上に向かって繩叩きを施し、工具の痕跡もはっきりと観察でき、原体の幅は5cm程度と考えられる。

(8) 平瓦で(7)と同様に、凹面には布目が残り、幅約3cmの桶状模骨痕と中央部には布を縫った痕跡が観察できる。凸面部には繩叩きが施される。下端面は摩滅しているが範で調整がおこなわれている。

(9) 上の(7)、(8)とは若干異なった調整がみられる。凹面部には布目がほとんど模骨痕に沿って縦方向のナデが施されている。凸面部の方は繩叩きが観察できる。端面は範で面取りを行う。

(10) も同様に平瓦であり、(9)と同じように凹面部には模骨に沿った縦方向のナデを行い、凸面には繩叩きが見える。(9)、(10)共に、凸面は摩耗が激しい。

(11) は凹面の狭端部に模骨の方向とは反対に、横ナデを施す特徴が見られる。凸面部には繩叩きを施す。狭端上面は範による調整を行なう。

(12) の平瓦は凹面部に布目が残っており、模骨痕も観察できる。凸面部は繩叩きを行なった後で横方向にナデをかけている。これまでの凹面横ナデとは逆のパターンである。狭端面は範を用いて調整を行なっている。

(13) これも(12)と同じで凹面部には布目が残り、凸面部には繩叩きの後で縦、横の方向へナデを行なっている。しかし、(12)の遺物と比べ、桶状模骨の痕跡が見られず断面が平坦である事から、平瓦としてよりもむしろ熨斗瓦の破片として捉える事ができよう。

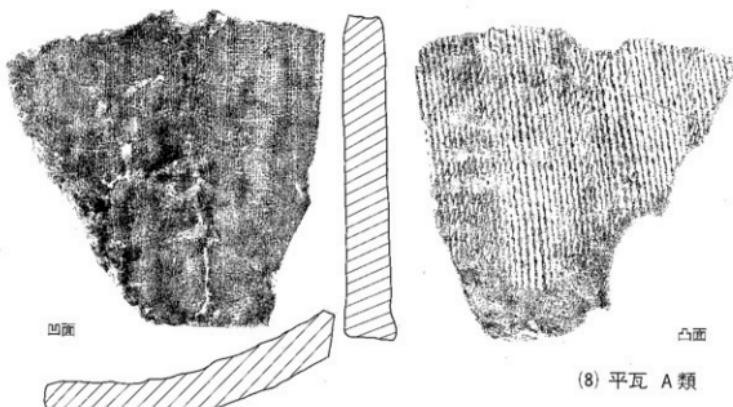
(14) この遺物も凹面部には布目がはっきりと残っているが、凸面部は縦方向への丁寧な範削りを施している。下の端面も範削りがなされており、斜めに削り出されている事から、軒平瓦の制作課程における瓦当との接合前の製品と考えられる。

## 7、まとめ

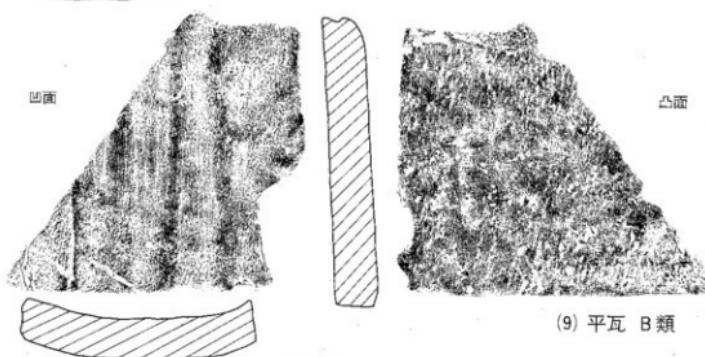
ここまで前回の1995年度に調査した際の遺物と今回出土した遺物をあわせて報告する事ができた。これまでの遺物の観察結果から若干のまとめを行ないたい。

軒平瓦について1995年度のFig. 6(1)と今回調査のFig. 8(1)、Fig. 11(14)がこの種に該当する。その中でもFig. 8(1)は、ほぼ半分が残っており、断面の観察から瓦当面と平瓦面を製作、接合してから凸面部に粘土を充填し、さらに範削りによる調整を行なったものと考えられる。(註1)

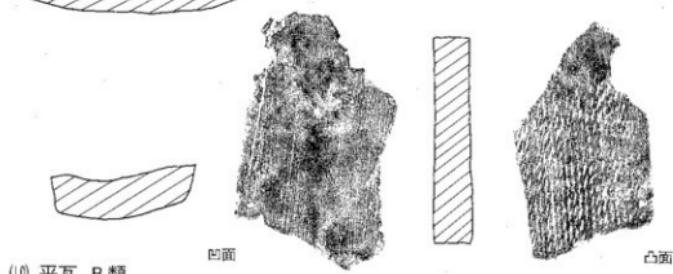
次に瓦当文様は、中心部から3回反転の均整唐草文と左右と上下の外区には線鋸歯文を



(8) 平瓦 A類



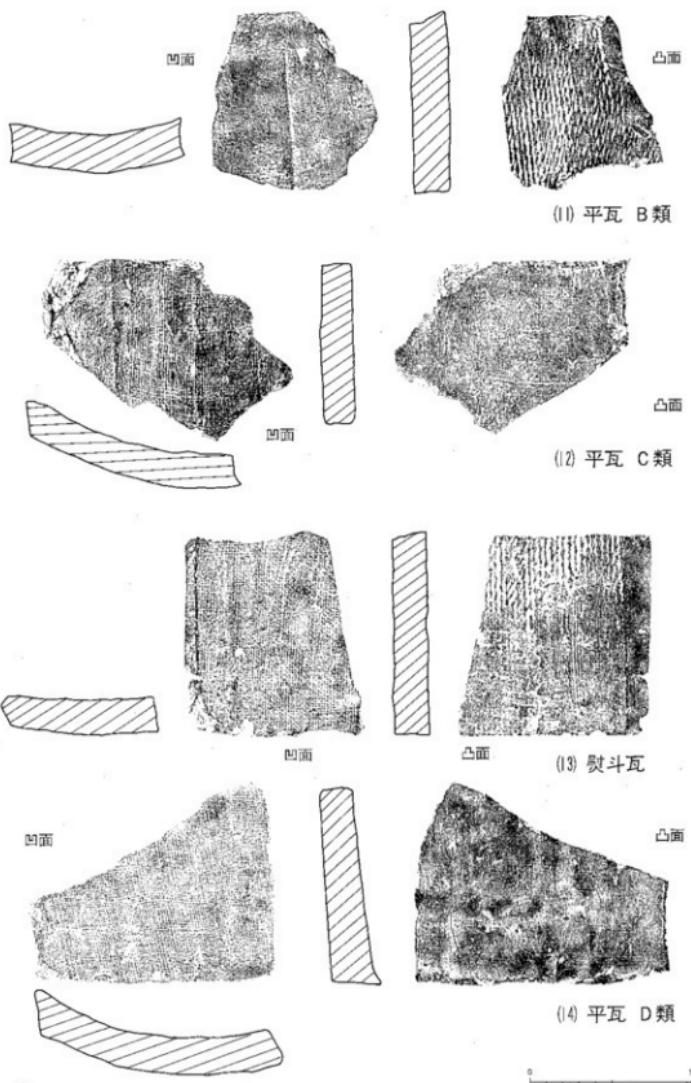
(9) 平瓦 B類



(10) 平瓦 B類

0 10 cm

F i g . 1 0 加茂ハイタノクボ遺跡出土遺物実測図 3 (S = 1 / 3)



F i g . 1 1 加茂ハイタノクボ遺跡出土遺物実測図 4 (S = 1 / 3)

巡らせるといった特徴が観察できる。類例は後述する香川県の善通寺市に所在する善通寺の旧伽藍から表探された資料に同范の可能性がある。(註2)

次に丸瓦について、今回出土した遺物はすべて凸面部は繩叩きを行ったもの、もしくは繩叩きの後でナデを行うもので、凹面部は模骨に巻かれた布の痕跡が観察できる。そして、玉縁の部分は粘土を伸ばして模骨に沿わせながら不足した粘土を肩の部分に充填するという特徴を持っている。(註3)

今回もっとも多く出土した平瓦は、破片が多く全体を想定するのは困難であるが、断面観察の結果、成形材に粘土版を用いて桶状容器に巻き付けた後に凸面部を工具による繩叩きを行ったものと考えられる。(註4)

平瓦は凹面、凸面の調整手法によって4種類に分類できる。以下、それぞれの特徴を述べると、

A類：凹面、凸面ともに布目、繩叩きがそのまま無調整で残るもので、Fig. 9の(7)、Fig. 10の(8)がこれらに該当する。また、1995年度調査分の遺物ではFig. 6の(3)、(4)、Fig. 7の(5)もこれらに該当する。

B類：凸面はそのままであるが、凹面にある布目をナデ消すものがある。Fig. 10の(9)、(10)は桶状の模骨痕に沿って広端面側から縦方向にナデを行っている。Fig. 11の(11)は狭端面側の破片であるが、同じように縦方向へのナデを行った後、横ナデで仕上げをしている。1995年度の遺物ではFig. 7の(6)がB類に含まれる。

C類：Fig. 11の(12)がこのタイプに該当する。狭端面側の一部と考えられるが、凹面は布目がそのまま残る無調整のものであり、凸面部の繩叩きを横方向のナデによって消すという特徴をもっている。

D類：凹面部には布目痕が残り、凸面部は縦方向に鎔切りを行っている。凸面部の調整は軒平瓦の調整と良く似ている事、断面の形態がFig. 8(1)の軒平瓦とも共通する事から本来は軒平瓦との接合を意図して作られたものと考えられる。軒平瓦の製作工程を考える上で興味深い。

最後にFig. 11の(13)は、熨斗瓦と考えられる遺物である。断面がいずれも平坦であり、厚さもほぼ均一である。成形材は平瓦を切つつくったものと考えられる。端面の仕上げも鎔切りによる面取りが行われている。

これまで1995年度調査分の遺物と今回の調査で出土した遺物について若干のまとめを試みたが、県内の古代寺院の発見数、調査事例の少ないこうした状況下において執筆者自身の不勉強もあいまって十分な遺物の観察ができなかった感があるが、今回の調査において出土した軒平瓦とこれまでに発見された軒丸瓦、軒平瓦と共にその制作年代については次章で述べる事にしたい。

#### 註・参考文献

(註1) 軒平瓦の製作技法については、主に遺物断面の観察結果をもとに想定したが、本

報告書製作中に吉成承三氏（県埋蔵文化財センター調査員）から貴重な助言を賜った。

(註2) この軒平瓦は香川県善通寺市在住の安藤文良氏が所蔵されている遺物である。今回加茂ハイタノクボ遺跡で出土した遺物と照合した結果、同范の可能性がきわめて高いと判断した。瓦当文様は中心葉から左右に唐草文が3回ずつ反転し、上下左右の外区には線鋸歯文が配されている。

(註3) 丸瓦の製作技法については、大脇潔氏の「研究ノート 丸瓦の製作技術」(『研究論集IX』奈良国立文化財研究所学報 第49冊 1991年3月刊)を参考にした。なお、玉縁の成形方法については大脇氏の分類されたC1類に該当するものと考えられる。

(註4) 平瓦の製作技法や観察にあたっては、佐原真「平瓦桶巻作り」(『考古学雑誌』第58卷2号 1972年刊)と滝本正志「平瓦桶巻作りにおける一考察—粘土円筒分割のための指標の種類について—」(『考古学雑誌』第69-2 1981年刊)を参考にした。

今回の出土遺物の観察では桶状容器から瓦を分割するための目印（分割突部）は発見できなかった。今後の調査成果の蓄積と更なる良好な遺物の出土に期待される。

また、瓦全般の分類、観察方法等は『内山瓦窯—1号窯発掘調査概要—』(大和郡市山市教育委員会 1995年3月刊)も大変参考になった。  
このほかに以下の文献を参考にした。

小林行雄『統古代の技術』塙選書44 塙書房 1964年刊(平成10年6月再版)

岩永省三「瓦の製作から葺き上げまで 古代技術の復元的研究事例」『奈良国立文化財研究所研修資料 生産遺跡調査課程』(奈良国立文化財研究所 1998年3月刊)

川畑聰『讃岐の古瓦展』(高松市歴史資料館 第11回特別展図録 平成8年1月刊)

### 第3章 考 察

今回の試掘調査では明確な遺構は検出できなかったが、そのかわりに多くの瓦類が出土した。また、前述したように加茂ハイタノクボ遺跡（以下、本遺跡と略す）の周辺では古瓦が表採されているが、発表されずに今日に至っている。本稿ではこれまでに発見された資料を紹介すると共に、今回の調査結果とあわせて出土遺物の時期について考えてみたい。

#### 1、加茂ハイタノクボ遺跡の周辺でこれまで発見された遺物について

まず始めに Fig. 12 の (1) であるが、1990年に今回調査を行った TR-1, TR-4 の北側にある石垣が崩壊したときに発見されたものである。瓦当面の半分が残っていて色調は青灰色を呈し、表面の内区には復弁で4枚の花弁が表現されている。中房部分には中央に1個+周辺に8個の蓮子が配されていたと考えられ、外区には線鋸歯文を巡らせている。側面には拗型の痕が明瞭に残り、笠による削りを施す。裏面は指によるナデを行っている。

(2) の遺物も(1)と共に発見されたものであり、周縁部が欠けてはいるが瓦当の全体を想像する事ができる。しかし、瓦当文様は摩耗が激しい。この遺物も中房に1+8の蓮子を配し、8枚の復弁が表現されている。また、丸瓦の部分と瓦当部分との間が剥離しており、瓦当部分の厚さが5mm程度である事が観察できる。この瓦を製作する工程を考える上で興味深い資料である。焼成は土師質を呈し、不良である。

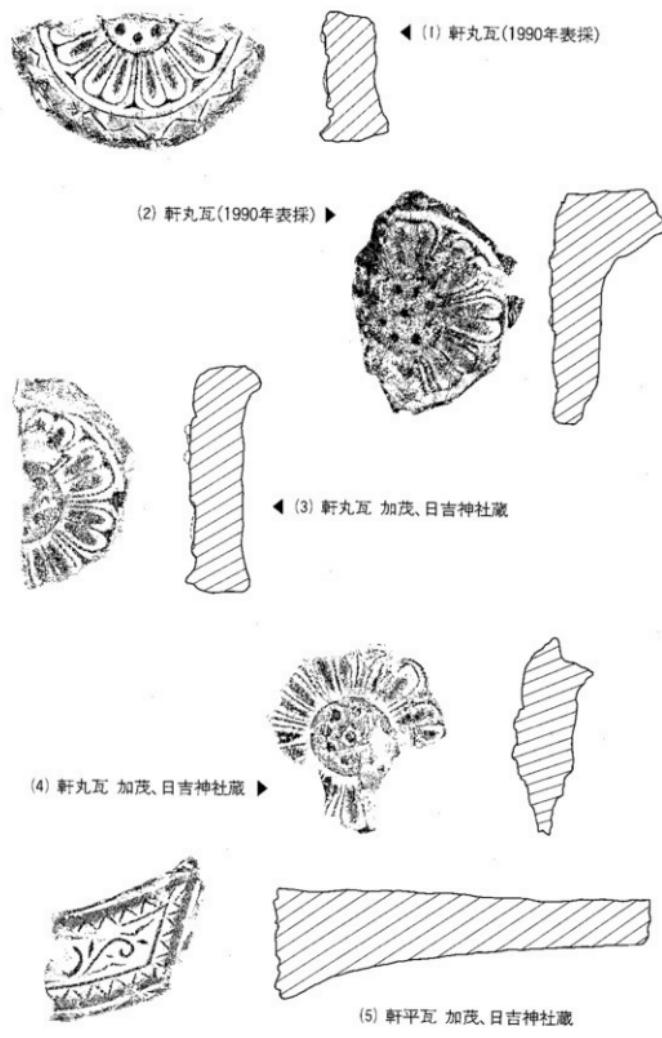
裏面にはあらいナデ調整を行った後で丸瓦との接合部を補強するために粘土の生地を厚めに伸ばして貼りあわせている。

(3) の遺物は今回調査を行った地点の北側に立地する日吉神社に保管されていたものである。周縁部が欠けており、瓦当の半分が残っている。中房部分には中心に1、周辺に8個の蓮子が配されていたものと考えられる。裏面には丸瓦との接合部に向けてナデが行われている。鉛筆による「賀茂 出土」の注記がなされている。

(4) この遺物も日吉神社に保管されていたものである。これまで紹介した軒丸瓦の中ではもっとも破損がひどく、中房部分と花弁が若干残るものである。裏面には丸瓦と接合のための段差が残り、接合面に向かって指頭によるナデが行われているのが観察できる。また、この遺物にも鉛筆によって「加茂出土 昭和十五年」の出土時期を記した注記が行われている。(註1)

(5) この軒平瓦も(3)、(4)と同様に日吉神社に保管されていた遺物である。前述した Fig. 8 (1) の今回出土したの軒平瓦と共にこの種の瓦の全容を想像する事のできる遺物である。凹面部は平瓦部に布目痕が残っており、瓦当面にかけて削り調整が行われている。凸面部には側面と共に笠による丁寧な削りを行っている。

これまでに出土した遺物について紹介を試みたが、今回調査にて出土した遺物と併せると、軒丸瓦、軒平瓦とも同じ瓦当文様をもつ遺物が出土し、これらの瓦のセット関係を想定することが可能ではないかと考えられる。



F i g . 1 2 加茂周辺で表採、保管の遺物

0 10 cm

## 2、香川県出土の遺物と本遺跡出土瓦について

加茂ハイタノクボ遺跡の調査終了後、本報告書を作成するにあたり Fig. 12 (1) の遺物をもとにして、本遺跡の他に高知県内に存在する古代寺院跡、窯跡等の中でこの遺物を生産もしくは消費した遺跡の追跡調査を試みたが、現在のところ県内の古代寺院跡、窯跡のいずれも該当するものは発見できなかった。

そこで、四国4県に範囲を広げて資料調査を行った所、香川県で同じ文様の遺物を発見する事ができた。(註2) ここでは香川県出土の瓦類を紹介させていただくと共に、本遺跡で出土した Fig. 12 (1) の遺物との比較検討を行う事で、この章の始めに述べた瓦の時期についての手がかりにしたいと考えている。

Fig. 13の(1)の軒丸瓦は善通寺市の大森武氏が所蔵する遺物である。現在、中心となっている伽藍の東側にあったと考えられている奈良時代の伽藍跡の敷地内で建物の工事中に発見されたものである。瓦当面は一部周縁部と中房内の蓮子が欠けてはいるが、この瓦の全容を知る事ができる。裏面は丸瓦との接合部を丁寧にナデを行って仕上げる。側面部には枷型の痕跡も観察できる(註3)。

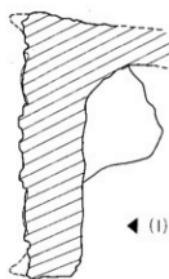
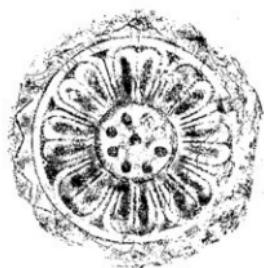
次の(2)の資料は軒平瓦である。同じく善通寺市の安藤文良氏が表採された遺物である。瓦当面の内区には中心葉から左右に3回ずつ反転する均整唐草文を巡らせている。外区には線鋸歯文を配している。瓦の凹面部には瓦当筋の痕跡と布目が残り、瓦当付近は布目が削られている。凸面部の方は、下から上に向けて鎧切りが施される。また、左右の側面が切り取られているのが観察でき、Fig. 12の(5)と比較していただきたい。断面は直線彎を呈す。(註4)

(3)の軒丸瓦も安藤文良氏が現在の善通寺の北東に位置する仲村廃寺(伝導寺)跡から表採されたものである。瓦当面の上側と周縁部が若干破損しているが、先に紹介した(1)の瓦と同じ文様をもつと考えられる。裏面は丸瓦部分へ向けた丁寧なナデが行われている。断面の厚さが若干他の瓦類と比べるとやや薄いという特徴が観察できる。

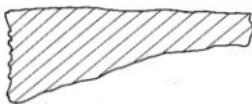
続いてFig. 14の(4)は善通寺市郷土館が所蔵する仲村廃寺跡から表採された遺物である。この遺物も上面に若干の損傷がみられるが瓦当面はほぼ完形に近い残り具合である。側面には枷型の痕が見られ、裏面はこれまでの遺物と同様に丁寧にナデを行っているが、丸瓦と接合する部分で剥離している。瓦の接合方法を考える上で興味深い遺物である。

(5)は丸亀市の宝幢寺跡から出土した遺物である。現在は、丸亀市立郡家小学校に保管されている。周縁部の線鋸歯文は欠けてはいるものの、焼成は良好であり、瓦当文様も先の(4)と共にはつきりとしている。また、裏面の調整も丁寧なナデを行っている。

豊中町が保管する道音寺跡出土の軒丸瓦である(6)は上半分の外縁が欠けており、瓦当面も摩耗がみられる部分も多いが、下半分は良く残っている。他の軒丸瓦と違い、胎土に砂粒が多く含まれる事、裏面の接合部分の調整が他の瓦と比べると少し荒くなる事という特徴がある。瓦当側面には枷型の痕跡が観察でき、鎧などの工具で削りを行ったものと考えられる。



◀ (1) 善通寺  
旧伽藍跡出土  
(大森武氏藏)



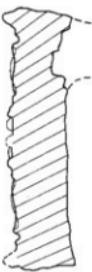
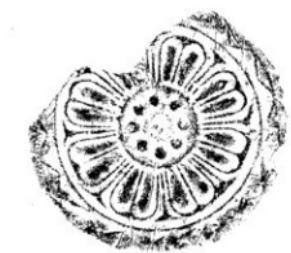
◀ (2) 善通寺跡出土  
(安藤文良氏藏)



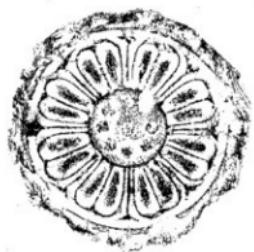
◀ (3) 仲村磨寺跡出土  
(安藤文良氏藏)

0 10 cm

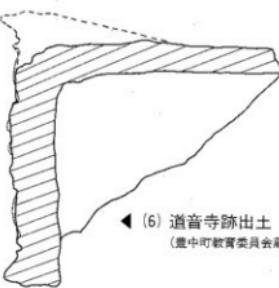
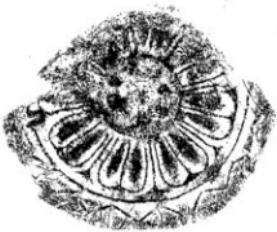
F i g . 1 3 香川県出土瓦その1 (S=1/3)



◀ (4) 仲村廃寺跡出土  
(普通寺市郷土館蔵)



◀ (5) 宝幢寺跡出土  
(丸亀市立郡家小学校蔵)



◀ (6) 道音寺跡出土  
(豊中町教育委員会蔵)

0 10 cm

F i g . 1 4 香川県出土瓦その2 (S = 1 / 3)

さて、これまで香川県出土の遺物と高知出土の遺物との紹介を行ったが、引き続いてこれらの遺物の時期を考えるために瓦当面についた範傷に注目して考察を加えてみたい。

まず始めにFig. 15の図版を見ていただきたい。Fig. 12(1)であるが、これを基準として、瓦当面上についた範傷の位置を記したものである。中房部分と外縁部には範傷が見当たらなかったが、花弁と間弁に傷が残っていた。左側から第1花弁、第1間弁～第4間弁、第4花弁のように花弁と間弁を一つの単位として捉えた。

範傷は第4花弁の左側に中房に接するように長さ4mm幅2mm程度の隆起がみられる。これを傷Aとする。次に第2間弁と第3花弁の間にある長さ2mm程度の隆起を傷B、同じく第3花弁の中央を画する線の根元に傷Cが確認できる。傷Dは第3花弁右側の界線部分に接する傷である。

Fig. 16にはそれぞれ遺物の範傷の位置を図示している。また、図中の矢印は6番の遺物の正位置を表したものである。1、善通寺跡の軒丸瓦は正位置が反対になっているが、傷Aが確認できる。2、仲村廃寺（安藤氏蔵）の遺物も傷Aが確認できる。次に3、善通寺市郷土館蔵の仲村廃寺の軒丸瓦も傷Aが残るが、この遺物の傷は前の1、2、の傷と比べると大きくなっている。

4の宝幢寺の遺物（丸亀市郡家小学校蔵）になると新しく傷Bが出現する。5の道音寺（豊中町教委）の遺物になると傷C、Dが新たに増え、6の高知県加茂ハイタノクボ遺跡の遺物と同じ位置に傷ができる。

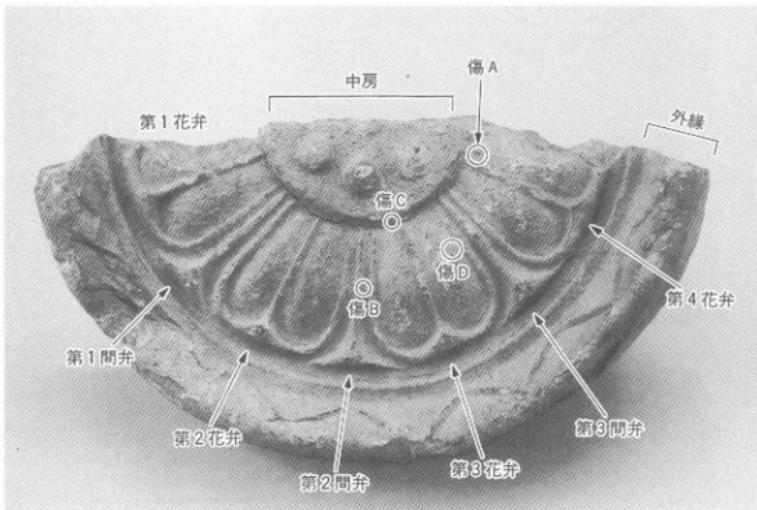
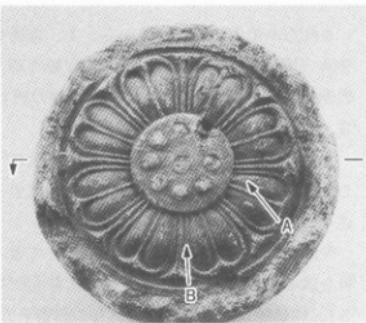


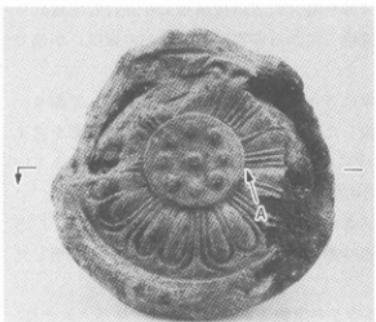
Fig. 15 加茂ハイタノクボ遺跡出土瓦範傷位置図



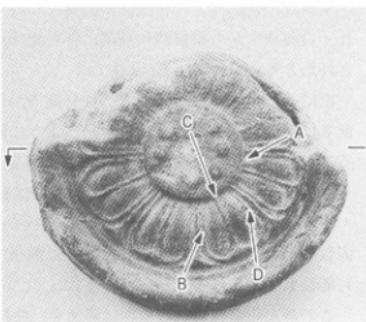
1. 香川、善通寺跡（大森武氏蔵）



4. 香川、宝幢寺跡（丸亀市立郡家小藏）



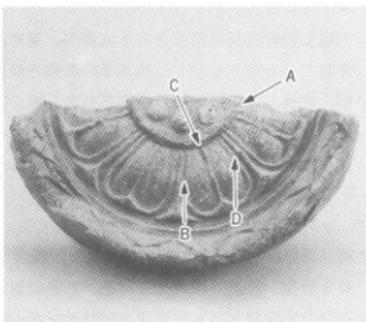
2. 香川、仲村庵寺跡（安藤文良氏蔵）



5. 香川、道音寺跡（豊中町教委蔵）



3. 香川、仲村庵寺跡（普通寺市郷土館蔵）



6. 高知、加茂ハイタノクボ遺跡出土

F i g . 1 6 軒丸瓦范傷進行図

これらの範傷の進行状況から、1、善通寺跡・2仲村廃寺跡（安藤氏蔵）→3、仲村廃寺跡（善通寺市郷土館蔵）→4、宝幢寺跡（丸亀市郡家小学校蔵）→5道音寺跡（豊中町教委蔵）→6、加茂ハイタノクボ遺跡の順で範が移動したものとおおむね推定できる。

### 3、まとめ

こうした範傷に注目した瓦当範の移動の可能性について高知、香川の両方の遺物を比較した結果、上記のような範の移動を想定する事ができた。これをもとに瓦の時期について述べてみたい。

今回報告したこれらの軒丸瓦について蓮本和博氏は香川県下の川原寺系軒丸瓦の系統分析を試みられた際にこのタイプの瓦を「形式化、退化の進んだ例」として位置づけられ（註5）、川畠聰氏は川原寺式軒丸瓦の影響下で創作されたものと考えられた。（註6）本稿でもこの理解に沿って考えてみたい。

1～3の善通寺と仲村廃寺の関係については仲村廃寺の方が善通寺より先行して建立され、白鳳期末から奈良時代前期に仲村廃寺が廃絶してから旧善通寺（現在の東院）が建立されたと考えられている。（註7）

次に4、宝幢寺跡は善通寺、仲村廃寺から東に5キロほど離れた地点に立地しており、前者は那珂郡、後者は多度郡というように隣接した郡同士であった事から範の移動を考える事ができる。（註8）だが、次に述べる道音寺に範が移動するまでの間に範傷の増えていく課程を示す良好な資料は今回の調査では見出せなかった。

道音寺で出土した5の遺物は、加茂ハイタノクボ遺跡で出土したFig. 12 (1)と同数の範傷が確認されており、互いに前後する時期にこのタイプの瓦を焼成して使用した可能性も考えられる。（註9）

この事から奈良時代の前期に善通寺、仲村廃寺から宝幢寺を経て道音寺で使用された後、奈良時代の中～後期にかけて高知の加茂ハイタノクボ遺跡にも範型が持ち込まれたものと考えられる。

以上の軒丸瓦の範傷をもとに香川、高知の両県にまたがって出土した遺物について考察をおこなった。しかし、執筆者の未熟さゆえに十分にその責任を果たす事ができなかったが、今後、この拙い報告を叩き台として、古代瓦の地域間交流研究の一助となれば望外の喜びとする所である。

最後になったが、本報告書を作成するにあたって、次の方々より指導、助言を賜った。記して深く感謝の意を表したい。

水野正好先生（奈良大学）、森郁夫先生（帝塚山大学）、遺物の借用にあたっては地元の岡林華伝氏、香川県の安藤文良氏、大森武氏、川畠聰氏（高松市教育委員会）、善通寺市教育委員会、善通寺市郷土資料館、丸亀市教育委員会、丸亀市立郡家小学校、豊中町教育委員会の各機関と高知県埋蔵文化財センターの山本哲也氏、武吉真裕氏を始めとする先輩諸兄と、今回このような機会を与えて下さった土佐山田町教育委員会にも心よりお礼申し上げたい。

## 註・参考文献

- (註1) Fig. 12 の (3)、(4) の遺物は日吉神社元官司である岡林華伝氏によって表採・保管されていたものである。
- (註2) 川畠聰『讃岐の古瓦展』図録 高松市歴史資料館 平成8年1月刊
- (註3) 大森氏所蔵のこの瓦は安藤文良氏の「仲村廃寺—鶴尾の上がったひとかどの寺だったー」『文化財協会報 第十八号』1999年3月刊によって最近紹介されたものである。
- (註4) 前述の第2章でも触れたが本遺跡出土の遺物と比較した結果、同范の可能性が大きいとの結論を得た。この軒平瓦については川畠氏によって「平城宮式の亜式」として評価されている。
- (註5) 蓮本和博氏「讃岐における白鳳寺院出土瓦の研究—川原寺式軒丸瓦の系譜の作成を通じて—」『香川県自然科学館研究報告15』1993年刊 P73
- (註6) (註2) と同じ。
- (註7) 善通寺と仲村廃寺の関係については(註2)のほかに笛川龍一氏の『仲村廃寺発掘調査報告(旧練兵場遺跡内)』善通寺市教育委員会1984年3月刊と『仲村廃寺』善通寺市教育委員会1989年3月刊をそして、『古代寺院の出現とその背景』第2分冊—第42回埋蔵文化財研究集会一同研究会1998年刊のレジュメも参考にさせていただいた。
- (註8) 宝幢寺については(註2)と『宝幢寺発掘調査報告』丸亀市教育委員会 1980刊を参考にした。また、宝幢寺からは讃岐国分寺の創建瓦が出土しており、本稿で紹介した遺物は国分寺創建期瓦の出現前に善通寺・仲村廃寺からもたらされて使用されたと考えたい。
- (註9) 道音寺についても(註2)の記述をもとに『町内遺跡発掘調査概報』豊中町教育委員会 1991年3月刊を参考にした。道音寺で多く出土するタイプの瓦(DO103)は間弁部分が「Y」字形に先割れしており、今回報告したFig. 14の(6)と比べて形態的にも若干後出の要素がみられる事からこの遺物(DO103)に先行するものと考えられる。
- また、註に引用した文献のほかに次の文献を参考にした。
- 『日本の古代瓦』森郁夫著 雄山閣 1991年刊
- 『古代』第97号 早稲田大学考古学会 1994刊
- 毛利光俊彦 「考察」『平城宮発掘調査報告XIII』奈良国立文化財研究所 1991刊
- 藤井直正 「讃岐国古代寺院跡の研究」 藤沢一夫先生古希記念『古文化論叢』 同記念論文集刊行会 1982刊
- 金子裕之 「軒瓦製作技法に関する二、三の問題」 奈良国立文化財研究所創立

30周年記念論集『考古学論叢』 同朋社 1983刊  
星野獻二 「鎧瓦製作と分割型」 『考古学雑誌』67巻-2 日本考古学協会  
1981刊

95年試掘跡(95-1 YK)出土遺物観察表										
F i g	No	名称	瓦当径	瓦当厚	色調	胎土:	含有砂礫	焼成	調整	備考
6	1	軒平瓦	1.0, 4 c.m.	3, 3 c.m.	白	精良、珪質岩片	不良	凸面に継ナデ	瓦当面に均整感	
6	2	丸瓦	1.1, 0 c.m.	2, 4 c.m.	淡黄灰	精良、珪質岩片	不良	凸面継ナデ凹面布目	基文を施す 王絵部分	
6	3	平瓦	1.7, 2 c.m.	2, 3 c.m.	浅黄	精良、珪質岩片	不良	凹面布目、凸面継	凹面模骨痕	
6	4	平瓦	1.5, 2 c.m.	2, 7 c.m.	浅黄	精良、珪質岩片	不良	凹面布目、凸面継 印	凹面模骨痕	
7	5	平瓦	1.5, 5 c.m.	2, 4 c.m.	淡黄灰	精良、珪質岩片	不良	凹面布目、凸面継 印	凹面模骨痕	
7	6	平瓦	1.7, 2 c.m.	2, 4 c.m.	白	精良、珪質岩片	不良	凹面布目、凹面印 き	凹面模骨痕	

加茂ハイタノクボ遺跡(9-1-7 YK)出土遺物観察表										
F i g	No	名称	瓦当径	瓦当厚	色調	胎土:	含有砂礫	焼成	調整	備考
8	1	軒平瓦	1.7, 7 c.m.	5, 0 c.m.	淡黄褐	精良、堆積岩片	不良	凹面布目と削り凸 面に削り	凸面は削り後ナ デ	
8	2	軒丸瓦	3, 6 c.m.	2, 9 c.m.	淡黄灰	精良、珪質岩片	不良	凹面は布目、凸面 印を消す		
8	3	丸瓦	9, 1 c.m.	2, 8 c.m.	淡黄褐	精良、珪質岩片	不良	凹面は布目、凸面 印を消す	王絵部分	
8	4	丸瓦	1.0, 8 c.m.	2, 2 c.m.	淡黄褐	精良、珪質岩片	不良	凹面は布目、凸面 印を消す	模骨痕	
9	5	丸瓦	1.0, 9 c.m.	2, 0 c.m.	淡黄灰	精良、珪質岩片	不良	凹面布目、凸面は ナデ		
9	6	丸瓦	1.1, 5 c.m.	2, 4 c.m.	淡黄灰	精良、珪質岩片	不良	凹面布目、凸面は ナデ		
9	7	平瓦	2.0, 8 c.m.	2, 1 c.m.	淡黄灰	精良、珪質岩片	不良	凹面布目、凸面継	模骨痕、A類	
10	8	平瓦	1.9, 5 c.m.	3, 1 c.m.	白色	精良、珪質岩片	不良	凹面布目、凸面継	模骨痕、布縞り 痕、A類	
10	9	平瓦	1.9, 5 c.m.	2, 4 c.m.	白色	精良、珪質岩片	不良	凹面布目を継ナ デ、凸面継印を	模骨痕、B類	
10	10	平瓦	1.3, 5 c.m.	2, 4 c.m.	灰白	精良、珪質岩片	不良	凹面布目を継ナ デ、凸面継印	模骨痕、B類	
11	11	平瓦	1.0, 1 c.m.	2, 3 c.m.	青灰	精良、珪質岩片	良好	凹面布目、凸面継	模骨痕、B類	
11	12	平瓦	1.4, 0 c.m.	2, 0 c.m.	灰白	精良、珪質岩片	不良	凹面布目、凸面 印ナデ	模骨痕、C類	
11	13	熨斗瓦?	1.2, 7 c.m.	2, 1 c.m.	青灰	精良、珪質岩片	良好	凹面布目、凸面 印、横方向ナデ	模骨痕	
11	14	平瓦	1.4, 5 c.m.	2, 9 c.m.	白色	精良、珪質岩片	不良	凹面布目、凸面継	D類(軒平瓦の 混入?)	

加茂周辺で表探・保管の遺物観察表										
F i g	No	名称	瓦当径	瓦当厚	色調	胎土:	含有砂礫	焼成	調整	瓦当文様
12	1	軒丸瓦	1.4, 7 c.m.	3, 1 c.m.	青灰	精良、珪質岩片	良好	側面に仰型痕とナ デ、裏面にナデ	内区復井八葉蓮 華文外区線縞文	
12	2	軒丸瓦	1.4, 2 c.m.	3, 1 c.m.	淡黄褐	精良、堆積岩片	不良	裏面に粘土充填後 ナデ	内区復井八葉蓮 華文	
12	3	軒丸瓦	1.3, 8 c.m.	3, 3 c.m.	淡黄白	精良、珪質岩片	不良	裏面にナデ	内区復井八葉蓮 華文	
12	4	軒丸瓦	1.1, 9 c.m.	3, 5 c.m.	灰白	精良、珪質岩片	不良	裏面にナデ	内区復井八葉蓮 華文	
12	5	軒平瓦	2.3, 7 c.m.	5, 5 c.m.	灰白	精良、堆積岩片	不良	凹面布目露削り、 凸面継削り	内区均整感草文 外区線縞文	

香川県出土瓦の織笠表										
F i g	No	名称・出土地	瓦当径	瓦当厚	色調	胎土:	含有砂礫	焼成	調整	瓦当文様
13	1	軒丸瓦 (善通寺)	1.6, 2 c.m.	3, 8 c.m.	青灰	精良、珪長岩	良好	側面に仰型痕とナ デ、裏面にナデ	内区復井八葉蓮 華文外区線縞文	
13	2	軒丸瓦 (善通寺)	2.5, 0 c.m.	5, 0 c.m.	暗青灰	精良、石英	良好	凹面布目、凸面継	内区均整感草文 外区線縞文	
13	3	軒丸瓦 (仲村虎 寺領人)	1.6, 2 c.m.	3, 0 c.m.	淡赤褐色	精良、珪長岩	良好	九瓦部に露削りと 裏面に丁寧なナデ	内区復井八葉蓮 華文外区線縞文	
14	4	軒丸瓦 (仲村虎 寺領人)	1.5, 8 c.m.	3, 7 c.m.	淡黄褐	精良、石英、長 石	良好	側面仰型痕とナ デ、裏面に丁寧な ナデ	内区復井八葉蓮 華文外区線縞文	
14	5	軒丸瓦 (宝峰寺)	1.5, 5 c.m.	3, 5 c.m.	暗灰色	精良、珪長岩	良好	側面に露削りと裏 面にナデを行う	内区復井八葉蓮 華文外区線縞文	
14	6	軒丸瓦 (道言寺)	1.5, 0 c.m.	2, 8 c.m.	淡茶褐色	精良、珪長岩、 雲母	良好	側面仰型痕とナ デ、裏面にあらい	内区復井八葉蓮 華文外区線縞文	

# 写 真 図 版



調査前（南より）



調査前（東より）



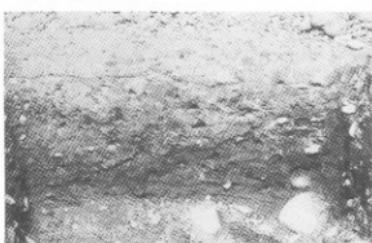
TR-1 完掘



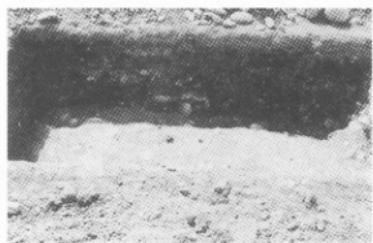
TR-1 セクション



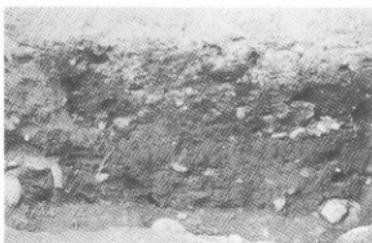
TR-2 完掘



TR-2 セクション

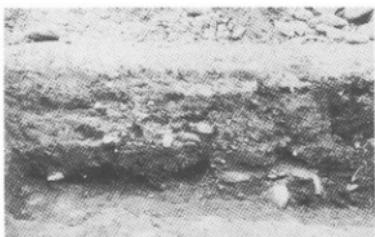


TR-3 完掘



TR-3 セクション（東）

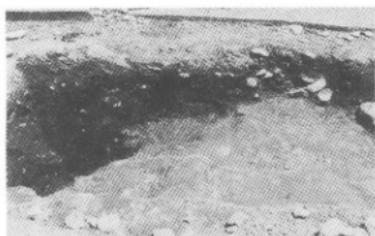
加茂ハイタノクボ遺跡 各トレンチ状況写真 1.



TR-3 (西) セクション



TR-4 完掘



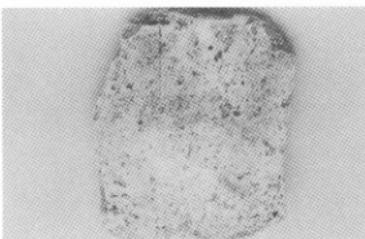
TR-4 セクション



軒平瓦 (TR-4 出土)



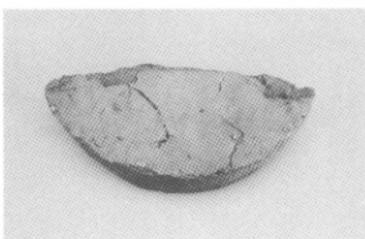
同 凹面



同 凸面



軒丸瓦 (1990年表採)



同 裏面



軒丸瓦（1990年表採）



同 裏面



軒丸瓦（加茂・日吉神社蔵）



同 裏面



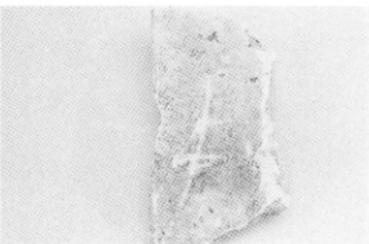
軒丸瓦（加茂・日吉神社蔵）



同 裏面



軒平瓦（加茂・日吉神社蔵）



同 凹面



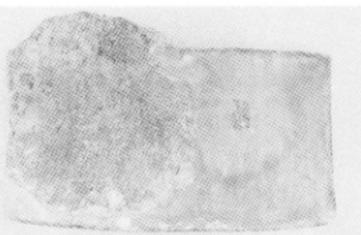
同 凸面



軒平瓦 普通寺跡出土（安藤文良氏蔵）



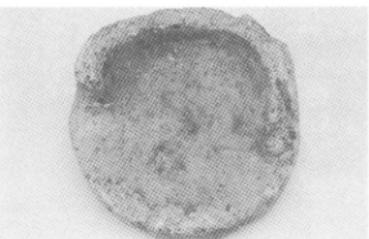
同 凹面



同 凸面



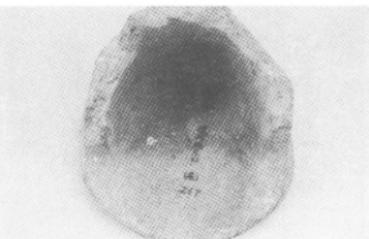
軒丸瓦 普通寺跡出土（大森武氏蔵）



同 裏面



軒丸瓦 仲村庵寺出土（安藤文良氏蔵）



同 裏面



軒丸瓦 仲村庵寺出土（普通寺市郷土館蔵）



同 裏面



軒丸瓦 宝幢寺跡出土（丸亀市立郡家小蔵）



同 裏面



軒丸瓦 道音寺跡出土（豊中町教委蔵）



同 裏面



丸瓦 凸面



凹面

加茂ハイタノクボ遺跡関連資料 2.と調査時出土遺物 1.



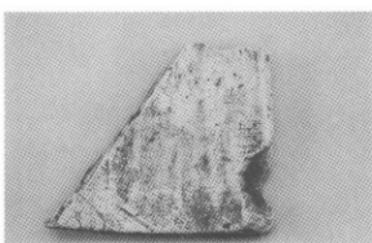
平瓦 A類 凸面



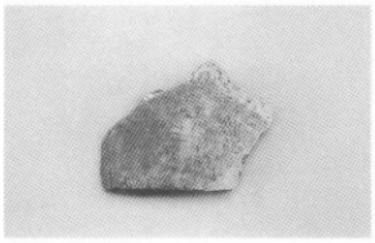
同 凹面



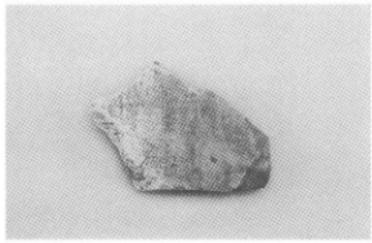
平瓦 B類 凸面



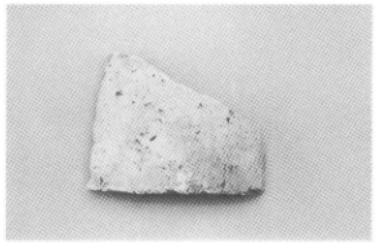
同 凹面



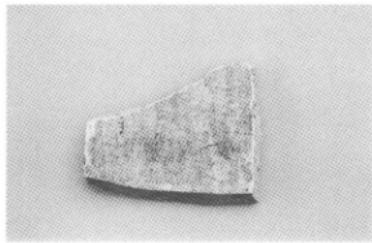
平瓦 C類 凸面



同 凹面



平瓦 D類 凸面



同 凹面

調査時出土遺物 2.

## 報告書抄録

ふりがな	かもはいたのくぼいせき							
書名	加茂ハイタノクボ遺跡							
副書名	県道(宮ノ口～深瀬線)建設に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書							
巻次	1							
シリーズ名	土佐山田町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第28集							
編集者名	川端清司							
編集機関	土佐山田町教育委員会							
所在地	〒782-0017 高知県香美郡土佐山田町岩橋365番地1 TEL. 0887-53-3111							
発行年月日	西暦 2000年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 通路番号	北緯 °' "	東經 °' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
加茂ハイタノク ボ遺跡	高知県香 み郡土佐 山田町加 茂宇ハイタ ノクボ他	393231	190200	33度 36分 10秒	133度 43分 17秒	1998年0 803～17	36m <sup>2</sup>	県道(宮ノ 口～深瀬 線)建設に 伴う埋蔵文 化財試掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
加茂ハイタノク ボ遺跡	窓業開発 遺跡(灰原)	奈良時代	旧地形の痕跡が残る	瓦類(軒丸瓦、軒平瓦、 熨斗瓦、丸瓦、平瓦)、 須恵器、土師質土器、 陶磁器、枕瓦	調査以前から瓦類が 表探されていたが、軒 丸瓦、軒平瓦が香川県 の善通寺跡等から出 土する瓦と同様關係に ある事が判明した。			

土佐山田町埋蔵文化財調査報告書 28集

加茂ハイタノクボ遺跡

県道官の口～深淵線建設に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書

2000.3.31

発行 土佐山田町教育委員会

高知県香美郡土佐山田町岩積 365-1

Tel. 0887-53-3111

印刷 株式会社ぎょうせい四国支社